

# 三十、金色のタイムカプセル (前編)

日本各地で様々な遺跡が発見され、私たちに日々新しい情報をもたらされています。このような遺跡も偶然に発見される場合が多く、一口に言えば地下からの眠りを覚ましてしまったような性格のものが大半です。しかし、地中に埋まる古代の文物の中には、明らかに将来の目覚めを意図して埋められたものが少なからず存在します。その一つに経塚(経筒)と呼ばれるものがあります。今回はこの経塚について少し触れてみたいと思います。

## 【未法思想】

日本への仏教伝来は、五三八年(一説には五五二年)とされ約千五百年近くが経過しています。飛鳥や奈良の荘厳な仏閣や造形物もこれらの浸透によって一つの文化として花開き、現在でも人々を魅了し続けています。平安時代になると、華やかさをさらに

できません。このような思想に基づいて将来のために経典を残そうと考え出されたのが「経塚」と呼ばれるものです。

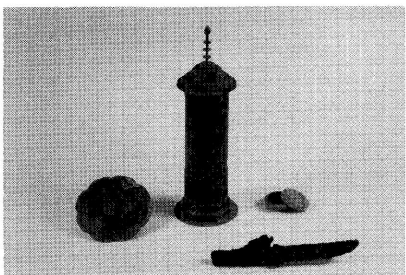
## 【経塚】

経塚はその名の通り、仏経典を供養の後に地下へ埋納し、封土したものを指します。日本へは慈覚大師円仁(七九四〜八六四)により、もたらされたとされています。

平安時代の後期頃に盛んに造られ、一部は江戸時代まで見られます。その多くは極楽往生や現世利益など、阿弥陀信仰によるものとされていますが、だんだんと本来の目的を外れ、経典の保存というよりは埋納者自身の願望を叶えるために埋められることが多かつたようです。埋納された経典は「法華経」・「般若心経」など様々なものがあり、書写するものは、紙・瓦・銅板・石・木(柿)・貝殻などの発見例があります。それらの経典を入れる容器を「経筒」と呼び、地下へ納めるのです。平安時代の経塚は寺院や神社の境内あるいは霊地として崇められている場所へ造られ

増していきますが、約千年程前からは、争乱やたび重なる飢饉・疫病など、社会が荒廃し混迷深まる時代でもありました。このような中で、平安時代の後半(一〇五〇年頃)になると、「未法思想」といった考え方が盛んになります。中国に起源がある考え方で「法↓像法↓未法」し、その最後の時期が未法で、この未法では、釈迦の教えを実行し、悟りを得た者が時の経過とともに少なくなり、仏法が滅んでしまうという予言的な思想です。当時の仏教徒への戒めの意味も含んだ思想とされていますが、当時は仏教界のみならず、国内の様々な考え方に影響を与えるものとなりました。この思想では、一〇五二年以降が未法の時期に入るとされ、その期間は一万年ともされていたようです。また、「釈迦入滅後、五十六億七千万年を過ぎると弥勒菩薩が釈迦の跡を継いで仏法を盛んにさせる。」とも説かれていたようですから、何とも気が遠くなるような気がしますが、これらの思想に頼らざるを得なかつた当時の社会情勢を垣間見ること

しているのが一般的です。さらに修験道と関係のある山々にもたくさん造られ、郡内では白山(久山町)、若杉山(須恵町)などでも発見されています。このような経塚の発見は当時の人々が信仰に対しどのように考えていたかを解明する上でも重要で、その中から発見される文物は私たちに様々な情報を与えてくれます。



白山(久山町)で発見された経筒

篠栗町文化財専門委員 新宅 信久